
結社の迅雷

デビル涼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結社の迅雷

【Nコード】

N6178Y

【作者名】

デビル涼月

【あらすじ】

碧の軌跡〜つながる姉妹の絆〜のIFストーリーです。

本来イリアに保護されるはずだったリスが結社に保護された場合の物語を描いたものです。5章序盤の結社が引くまでを描いていきます、最後はオリジナルなのでその辺が嫌だという方はお控えください。

本来の小説を書いた時に思いついた書きたいと感じた小説なのでおそらく短めで終わります。

1話「邂逅」

?? side

「それでは 幻焰計画 の見届け、頼みますよ。」

暗がりの広がる場所、星辰の間で二人の人物が会話をしていた。

「わかっています、すべては大いなる 盟主 のために。」

あたりに透き通る澄んだ声、姿が見えないのでどのような人物かを特定することもできない。

「そつえば………リリースはすでにクロスベルにいたのでしたっけ？」

「はい、おそらく今はカンパネルラと共に行動しているはずですが、早く合流したいものですね。」

先ほどの澄んだ声とは違って変ってやさしい口調で話す。

「ふふ、あなたはあの子のことを随分と好いているんですね。」

「私だけではありません、あの三人も、そしてカンパネルラでさえもリリスに心を開いていますからね。」

「そうでしたね、あの子は結社の中でも特別な存在でした、すぐにみな的心を掴んで……それゆえか、剣帝が亡くなったと聞いた時のあの子は見えていらませんでした。」

その声に若干の悲しみが混じる。

「……それは私もでした、リリスはいつも 剣帝 の傍にいましたね、レンと一緒に。おそらく…… 実の兄のように慕っていたのでしょう。」

そしてあの子はそのナンバーを受け継いだ、そう付け加えた。

「実の兄のように……そう言うならばあなたもでしょう。あの子にはあなたの事も実の姉のように慕っていましたよ、そしてあなた自身も実の妹のように可愛がっていた。」

二人は昔を……といっても1年前のことなのだがとても懐かしむように話す。

「そうですね……さて、すこし話し込んでしまいました、私はそろそろ失礼しますね。」

「ふふ、わかりました、それでは御武運を。」

その言葉を皮切りにその二人の気配はその部屋から消えた。

?? side end

——ミシユラム——

「いつまで隠れているつもりだ！いい加減に出てこい！」

夜の静けさの漂う中、一人の少年の声が響く。

その瞬間パチパチと誰かが手を叩く音が聞こえた。

「ウフフ、よくわかったねえ、」

「素晴らしい感の良さですね、さすがは数多の事件を解決してきた特務支援課のリーダーというわけですか。」

少年の声に続いてまだ幼さの残る少女の声が、屋根の上からした、先ほどまで正体不明の魔獣と戦っていた特務支援課の面々は声のした方向に視線が動く。

「なっ……!!?」

「男の子と……女の子!?!」

「……………気配を感じませんでした。」

「てめえら……………何モンだ?」

上から支援課のメンバー、ノエル、エリィ、ティオ、ランディが各々の反応を示す。

「うふふ、つれないなあ。一度すれ違っているはずだし知らぬ仲じやないっていうのに……………ねえ、特務支援課の諸君?」

「あなた、もしかして……………!」

「ヨナの部屋でロイドさんたちを罠にかけようとしたハツカー……」

そう、ロイドたちは以前ヨナの依頼でジオフロントに潜った、ここで部屋に閉じこまれポムツとでの対戦を挑まれたのだ、あぶないところだったがティオの助けにより無事事なきを得た。

「……そしてテロリストたちにタワーの情報を流した張本人か。」

ロイドが静かに言う。

「ああ、あのポムツとつていう動力ゲームで負けた時ですね、まあ意外と手先不器用ですからね。」

少女が少年に少し笑みをこぼしながら言うと、少年は少し恥ずかしそうに答える。

「しょうがないだろ、あの時はあれが初めてだったんだからさ。」

支援課リーダーのロイドはこのやり取りを見ていたがすぐに切り出す。

「そちらの女の子は会ったことはないが……お前は工房ですれ違

「つて以来だな？」

「ウフフ、正解。身喰らう蛇が執行者、No.0 道化師カ
ンパネルラ。以後お見知りおきを願うよ。」

そう少年が答えた瞬間、支援課メンバーが驚愕の表情を表す。

「っ……………！」

「リベールを混乱に陥れた謎の秘密結社……………！」

「あの工房の前で会った以上、関係があるとは思っていたが……………」

「ということはまさか……………その横の女の子もですか？」

今まで話しに入ってこなかった少女に皆の視線が集まる。

「そうですね、それでは私も名乗りましょう、身喰らう蛇 執行
者、No.2 迅雷 リリスです。どうかお見知りおきを願います。」

「やはり君も結社の一員だったのか……まあそれにしても、君たちがテロリストに協力していたなんてね……」

「ウフフ、彼らも災難だったよね。黒月に 赤い星座 ……厄介な連中が出てきたらねえ。」

「そうですね、たしかに帝国の方たちはお気の毒でした、なにも命まで奪うことはなかったでしょうに。」

少年とは裏腹に少女は少し悲しそうに話す。

「そんなこと言って！！あの人たちは仲間だったのになぜ助けなかったのですか！！」

「それは当然です、私たちには私たちの計画があります、彼らには本当に心苦しかったですが犠牲になってもりました。」

「フフ、そうそう、特に僕にとってはただの駒だからねえ。彼らの主張やイデオロギーにはまったくもって興味はないんだよ。」

「くっ……」

カンパネルラの物言いにノエルが悔しそうに顔をゆがませる。

「そっちの女の子は本当にそう思っているようだけど………君は随分といい性格しているじゃないか。」

「……ワジさんといい勝負なのではないかと。」

すると今まで黙っていたロイドが口を挟む。

「……戯言はそこまでだ。このクロスベルで何をしようとしている？そして何より………」

ロイドは武器を構え大声で叫ぶ。

「何よりも………キアをどこへ連れ去った!!!力づくでも話してもらうぞ!」

その言葉にカンパネルラは楽しそうに、リリスは見定めるように見る。

「ウフフ、いい気迫だねえ、でも君たちのお嬢様にh「カンパネルラさん、少し待ってください。」リリス?」

そういつてリリースはカンパネルラの前へと出る。

「私たちはその少女の居場所を知っています……教えてほしいですか??」

「ふざけるな!!」

「そうです、早くキアの居場所を教えてください!!」

「ふふ、なら……」

リリースは屋根から飛び降り、支援課の前に立つ。

「私を倒したなら教えて差し上げましょう。」

リリースは腰に差した刀を引き抜き支援課の方へと向ける、その瞬間濃密な闘気が支援課へと飛ぶ。

「くっ!!」

「いつは……相当やばいぞー！」

「でも立ち止まるわけには行かないわ！」

「そうですね、キーアちゃんを取り戻すために！」

「やれやれだね……（まさかここで 迅雷 と遭り合うことになるなんてね……）」

最初はリリスの放つ闘気に飲まれていた支援課だがすぐに立て直し、リリスへと武器を構える。

「行くぞみんな！一気にケリをつける！！」

「「「「ええ（はい）（おう）（サー）（了解）「「「「」

その支援課の声を聴いた瞬間少しではあるがリリスが微笑む。

「ふふ、いい気迫ですね……さあ来なさい、特務支援課！！」

迅雷と特務支援課が激突する。

2話「殲滅する力」

「さあ来なさい、特務支援課!！」

昼間の活気とは違ってかわった静けさの夜のミシユラムで一つの戦いが行われていた。

身喰らう蛇の執行者リリスと特務支援課である。

「はあ!！」

「女の子に攻撃する趣味はねえが………喰らいな!！」

ロイドがトンファーを突き出し、ランディがスタンハルバードをリリスに向かって振り下ろす。

両サイドから繰り出される攻撃、しかし次の瞬間二人の顔は驚愕に染まる。

「こんなもので私を仕留められると?舐められたものですね。」

「カキン!ガシ!……」

「なっ!?!」

「マジかよ……………」

リリスはランディの攻撃を自分の刀で受け止めた、ここまではロイドたちの予想通りだっただろう、片手に持つ武器を封じてしまえば彼女を守る者は何もないのだから。しかしロイドの攻撃は止められた、なぜならリリスが素手でロイドの腕を掴んだからである。

「驚いている暇はないですよ!!！」

リリスは刀をその状態で振りぬきランディを後方に吹き飛ばし、回し蹴りでロイドの腹を蹴った。蹴られたロイドも後方に飛ばされる。

「がっ……………!!！」

「ちっ!!！」

吹き飛ばされたロイドとランディエリィとティオが駆け寄る。

「大丈夫!? ロイド」
「まったく、敵と戦闘中によそ見とは随分と余裕ですね。」
「え!?？」

「エリイさん！上ですー！！」

リリスは二人を吹き飛ばした後すぐに上空へと姿を消していた、そしてリリスはクラフトを発動しようとする。

「三の舞、雪月「君の方こそ僕たちのことを忘れていないかい？せいー！！」「！？」

リリスはエリイにクラフトを発動しようとしたが後ろに回り込んでいたワジに気づいていなかった、ワジの蹴りがリリスに迫る。

「くっ！！」

リリスは刀でワジの蹴りを受け止める、空中なので無理な体運動ができないのか今のリリスには隙が出来た、そこをノエルとティオは見逃さなかった。

「行きますよ、ノエルさん！」

「はい、行きましょー！！」

際のできたリリスにノエルとティオがコンビクラフトを発動する。

「コブラストハンマー!!」

大火力の砲撃がリリスへと迫り……

「ドガンー!!」

リリスへ直撃し大量の煙が巻き起こる。

「や、やったか……」

「ああ、こっちからも見てたが直撃してたぜ。」

「……………」

皆がこれで終わったと思っていたがただ一人、ワジだけは険しい表情をしていた。

「驚きました……………」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

ワジを除く支援課のメンバーが驚く、倒したと思った少女の煙の中から聞こえてきたからだ。

「嘘だろ……………」

「ありえませんが……………確かに直撃したはずなのに……………」

「はい、たしかに直撃はしましたが、これがなければ少しあぶなかつたです。」

そこで煙が晴れる、リリスは桃色の障壁に囲まれていた。

「なっ!?!バリアー?」

「私のゼロ・フィールドと似たエネルギーを感知……………いえ、まったく別の物……………ですね。」

「あなたたちの見定めは終わりました、今はまだ小さな力ですが後々大きな力へとなるでしょう。」

リリースは剣を持っている手とは別の手に杖を持ち言うリリースの周りにはたくさんの光が集まる。

「なんだあれは……………」

「一つ一つに強力なエネルギーがある模様です!!」

「ドラグーンシューター。」

リリースがそう呟くといくつもの光が支援課へと向かっていく。

「絶対障壁を個別展開、ゼロ・フィールド!!」

全ての攻撃がティオの障壁へと当たって碎ける。支援課の面々は皆無傷だった。

「助かった、ティオ、ありがとう。」

「いえ、ですが一度しか防御できません、つぎはもう!?!」

「先ほどの攻撃はただの目くらましです、本命はこちらですよ。」

リリースに膨大な量の光があつまる、リリースは杖を前方に向け。

「集え明星、全てを焼き消す焔となれ、ルシフェリオン・ブレイカ
——！！」

圧倒的なエネルギーの砲撃が支援課に放たれた。

お知らせ

いきなりですみませんがこちらの更新を一旦停止させます。

先にもう一つのほうを完結させたいと思いましたが、

こちらを読んでくださっていた方々にはまことに申し訳ありませんが、つながる姉妹の絆が完結するまでお待ちください。

終わるまでなのでかなりかかるとは思います。今が2章中盤、まあもうすこしで終わりますけど、この後2章〜インターミッション〜3章〜4章〜断章〜5章〜終章と続きます。

何度も言いますが今一度お待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6178y/>

結社の迅雷

2011年11月20日19時53分発行